

莊子

岡本かの子

青空文庫

紀元前三世紀のころ、支那では史家が戦国時代と名づけて居る時代のある年の秋、魏の都の郊外櫟れきしや社の附近に一人の壮年ニ莊子が、木の葉を敷いて休んでいた。

彼はがっちりした体に大ぶ古くなった袍ほうを着て、樺の皮の冠を無雑作むぞうさに冠かぶつて居た。

顔は鉛色を帯びて艶つやが無く、切れの鋭い眼には思索に疲れたものに有勝ありがちなうるんだ瞳をして居た。だが、顔色に不似合な赤い唇と、ちぢれて濃い髪の毛とは彼が感情家らしいことを現わして居る。そうかと思えば強い高い鼻や岩のような額は意志的のもののようにも見える。全体からいつていろいろなものが錯綜し相剋し合つて居る顔だ。

莊子の腰を下している黍きび畑ばたけの縁どての土坡の前は魏の都の大梁たいりょうから、韓の都の新鄭しんていを通り周の洛邑らくいふに通ずる街道筋に當つていた。日ざしも西に傾きかけたので、車馬、行人の足並みも忙しくなつて来たが、土坡の縁や街道を越した向側やしうの社のまわりにはまだ旅人の休んで居るものもあり、それに土地の里民も交つてがやがや話声が聞えていた。里民たちは旅人たちから諸国のニュースを聴かせて貰うのを楽しみによくここに集つて来た。彼等は世相に対する不安と興味とに思わず興奮の叫び声を挙げた。莊子はそういう雑沓ざつたうには頓とん着ちやくなく櫟社の傍からぬつと空に生えている櫟くぬぎの大木を眺め入つて居た。その櫟

は普通に老樹と云われるものよりも抽^{ぬき}んでて偉^{おお}きく高く荒^{あら}筭^{ぼう}のような頭をぱさぱさと蒼空に突き上げて居た。別に鬱然とか雄偉とかいう感じも無くただ茫然と棒立ちに立ち天地の間に幅をしている。こんな自然の姿があらうか。しかし莊子はこの樹の材質が使う段になると船材にもならず棺材にもならず人間からの持てあましものの樹であり、それ故にまた人間の斧^{ふえつ}鉞^つの疫^{えき}から免れて自分の性を保ち天命を全^{まっ}うしているのだという見方をして、この樹を讚嘆するのだった。彼はつぶやいた。

「この樹は人間にしたら達人の姿だ」

そしてこの樹に対して現わした感慨の根となるものが彼の頭の中に思考としてまとまりかけて居た。Ⅱ「道」というものは決して人の目に美々しく輝かしく見えるものでもなく、はつきりと線を引いてこれと指さし得るものでも無い。自然の化育に従って、その性に従うものは従い、また瓦石^{がせき}ともなり蚊^{ぶん}虻^{ぼう}ともなつて変化に委^{まか}せて行くべきものはまたその変化に安^{やすん}じて委^{まか}せる。これが本当の「道」であるべきだ。他の用いを望んで齷^{あく}齷^{せく}、白馬青雲を期することは本当の「道」を尋ねるものの道途を却^{かえ}つて妨げるⅡだが、この考はただ何となく彼の頭のなかに据^{すわ}りが悪いところもあつた。人々は寸のものを尺に見せても世の中に出たがって居る。彼もつい先頃までその競裡に在つたのだ。この習性はそう急に抜

け切れるものではない。彼はまたしても櫟の大木を見上げて溜息をついた。

この時、大梁の方角から旅車の一つが轍わだちを鳴らして来たが荘子の前へ来ると急に止まって御者ぎよしや台の傍から一人の侷僂せむしが飛降りた。近付いて来ると

「荘先生ではありませんか、矢張り荘先生だった」

と云った。これは荘子のパトロンで諸国を往来して居る金持商人の支離遜だった。

支離遜は蜘蛛くものように土坡へ匍くい上り荘子と並んで腰を下すと言葉をはとばしさせた。

「今お宅へ伺いましたらこちらにお居でだと伺って直ぐ参りました。久し振りですな、先生なにかからお話して宜よいやら、それよりか先生、何故あなたはお勤めも学問の方もおよしになつてこちらへ御隠退なさいましたか、お知らせも下さらないで」

荘子は久し振りで支離遜に逢つて嬉しくもあつたが直ぐそれを聞かれるのはすこしうるさかつた。で、彼はごく手短かに引退の理由を話した。

この頃、孔子老子の二聖は歿して、約一世紀半ほどの距てはあるがいわゆる「学」と称とよえられるものは後嗣の学徒によつて体系を整えて来はじめ、それと伍して幾つもの学派が並び起つた。

孔子の倫理的理想主義を承うけて孟子は人間性善説を提掲した。これに対して荀子は人間

性悪説を執り^と法治論社の一派を形造つた。墨子の流れを汲む世界的愛他主義が流行^{はや}るかと思えば一方楊朱の一派は個人主義的享楽主義を高唱した。變つたものには「白馬、馬に非^あらず」の詞で知られて居る公孫龍一派の詭弁派の擡頭^{たいとう}があつた。また別に老子の系統をひく列子があつた。年代は多少前後するが大体この期間を中心におよそ人間が思いつくありとあらゆる人生に対する考えが衣を調え^{ととの}装いを凝^こらして世人に見えた^{まみ}のみでなく、義を練り言葉を精^{くわ}しくして互いに争つた。時代は七国割拠の乱世である。劍戟は巷^{ちまた}に舞つているこの伴奏を受けての思想の力争——七花八裂とも紛飛^{りようらん}繚^り乱とも形容しようもない入りみだれた有様だつた。

莊子は若くして孔老二子の学に遊び、その才気をもつてその知るところを駆使し学界人なき有様だつた。だが、彼は壮年近くなると漸く論争に倦み内省的になり、老子の自然に順^{したが}つて消極に拠る説に多く傾いて来た。しかし、六尺豊かな体躯を持つてゐる赫顔白髮の老翁の太古の風貌を帯^おべる考えと多情多感な詩人肌の彼の考えと到底一致する筈がない。結局莊子は先哲のどの道にも就^つかず、己れの道を模索し始めた。

莊子はこころの中一応これを繰返して考えて見たが、いかに自分に敬愛を捧げて居ればとて、眼の前の商人支離遜にそうこまかく話す張り合いもなかつた。そこで

「道は却つて道無きを道とす、かも知れないよ。つまり、仕官も学問も自分の本当の宝になるものじゃ無くて、詰らないからなあ」

そして荘子は今度は隠退後疎くなつて居た世間の模様を支離遜から訊く方の番に廻つた。支離遜の語るのを聴けば聴くほど世の中は変りつつあつた。強秦しんしんに対抗すべく聯盟した趙、燕、韓、魏、斉、楚、の合従がつしやうは破れはじめ、これに代つて各国別々に秦に従属しようとする連衡れんこうの氣運が盛さかんになつて来た。従つて人も変りつつあつた。六国の相印を一人の身に帯び車駕の数は王者を凌しのぐと称せられて居た合従の策士蘇秦は日に日に落魄の運命に陥り新あらたに秦の宰相であり連衡の謀主である張儀の勢力が目ざましく根を張つて来た。洛邑の子供達までが、迎うべき時代の英雄として口々に張儀の名を呼んだ。

尙儂の遜は屈かがんだ身体せい一ぱい動かして天下の形勢を説明した。年中諸国を縫ぬつて往来して居る彼は確たしかに世の中の実情を握んで居た。彼はその説明を終えるときこういう言葉をつけ足した。

「何もかも猫の眼のように變つて行きます。しかし、そのうちにたつた一つ変らないものがありますな。それは洛邑の名嬪めいひん麗姫の美しさですかな」

遜はあはははと笑つた。その笑いには野暮な学者に向つて縁の遠い女の話をするこの

奇抜さを面白がる響があった。

ところが莊子は意外にも熱心な色を顔に現わして来た。

「麗姫は近頃どうして居るかね」

これには遜もあつ氣にとられた。あなたのような堅人がどうして麗姫のことを御氣に掛
けられますかと問わざるを得なかつた。莊子はあつさり、それは世間で評判の女だし洛邑
では妻まで親しくして居たのだからと答えたが怪しく滑つた調子だつた。しかし莊子を信
じて居る遜はなるほどとうなずいてから學者にも興味のありそうな麗姫の最近の逸話を彼
に語つた。

ある夏の日の夕であつた。麗姫は自分の館の後園の池のほとりを散歩して居た。池には
新しく鯉こいが入れてあつた。麗姫は魚を見ようと池のへりに近寄つた。鯉たちは人の影を見
て急いで彼方の水底へ逃げた。水が彼女の裳もに跳ねた。しばらく顔を真赫まっかにして居た麗姫
がやがて

「なんとという失礼な魚達だろう。わたしは今まで誰にもこんな素気ないそぶりをされたこ
とがない。いくら無智な魚でもあんまりひどい」

と子供のようにやんちゃに怒り出したという噂を話し終つて遜は前にも増して転げるよ

うに笑った。

「どうです。魚にまで恨みごとを云う女です」

といつてまた笑った。莊子もつき合いに笑つて見せたが彼の憂鬱な顔には一種の興奮を抑えた跡が見えた。

支離遜は襟をかき合せて立上つた。

「お訣わかれいたします。今度は忙しくてお宅でゆるゆるさせても頂けません。この次にはぜひお訪ねいたします。それまでに一つあなたもあつと云わせるような学説を立てて世間を驚かせて欲しいですな」

支離遜の乗つた旅車の轍のひびきが土坡の彼方に遠く消えて行つた。

日はいつの間にか暮れた。櫛社の大木は眠つて行く空に怪奇な姿を黒々と刻み出した。この木を峙ねぐらにしている鳥が何百羽とも知れずその周囲に騒いで居た。鳴声が遠い汐鳴りのように聴えた。田野には低く夕靄ゆうもやが匍まかつて離れ離れの森を浮島のように漂わした。近くの村の籬落まがきはまばらな灯の点在だけになり、大梁と思われる地平線の一抹の黒みの中には砂金のような灯が混っている。

莊子は心に二つの石を投げられて家に帰つて来た。蘇秦も張儀も共に修学時代彼と一緒に洛邑に放浪していた仲間であつた。二人の仲のよいことは仲間でも評判だつた。それがいま、いかに戦国の慣いとは云え敵と味方に分れて謀の裏をかき合つて居るのだとは……蘇秦の豪傑肌な赫ら顔と張儀の神経質な青白い顔とが並び合つて落日を浴び乍ら洛邑の厚い城壁に影をうつして遊山から歸つて来た昔の姿がいまでも莊子の眼に残つて居る。今、廟堂で天下を争つて居る二人は全く違つた二人に思えた。このことはすでに莊子を虫食んで来た現実回避の傾向に一層深く思い沁みた。いやな世の中だ。ただただいやな世の中だ、と思えた。

しかし麗姫の事に係つて来ると、莊子のところは自然と緊張して来る。彼は隱遁生活の前、洛邑に棲んで居た頃度々（時には妻の田氏とも一緒に）宴席やその他の場所で彼女に会つたことがある。生一本で我儘でいつも明鏡を張りつめたような気持ちで力一ぱい精一ぱいに生活して行つて塵の毛程の迷いも無い。人間がその様に生きられるならば哲学とか思想とかいうものも敢て必要としないだろう。時々思い出して切なくなる莊子にそう思わせる麗姫はもと秦の辺防を司る將軍の一人娘であつた。戦国の世によくある慣いで父將軍はちよつとした落度をたてに政敵から讒言を構えられ秦王の誅を受けた。母と残された

麗姫はこのときまだこどもであつた。天の成せる麗質は蕾のままで外へ匂い透り行末希代の名花に咲き誇るだろうと人々に予感を与えている噂を秦王に聞かせるものがあつた。で、間もなく母にも死に訣れた麗姫は引取られ、宮に入れて育てられた。いづれ王の第二の夫人にも取立てられる有力な寵姫になるだろうと思われているうち、この王が歿し麗姫は重臣達の謀らいで遠くの洛邑の都に遊び女として遣られた。当時洛邑の遊び女には姫妃、褒姒、西王母、というようなむかし有名な嬌婦や伝説中の仙女の名前を名乗っている評判のものもあつた。客には士大夫始め百乘千乘の王侯さえ迎え堂々たる邸館に住み数十人の奴婢を貯え女貴族のようなくらしをしていた。この中に入った麗姫が努めずしてたちまちその三人を抜いて仕舞つたというのには、何か彼女に他と異なつた技巧でも備つて居たのかと云うに、却つてそれは反対であるとも云える。彼女は我儘で勝手放題にいらなければ貴顕の前で足を揚げ、低卓の鉢の白牡丹をその三日月のような金靴の爪先きで蹴り上げもした。興が起れば客の所望を俟たないで自ら囃し呼んで立つて舞つた。悲しみが来れば彼女は王侯の前でも声を挙げてわあ、わあ泣いた。涙で描いた眼くまの紅が頬にしたらたれ落ち顎に流れてもかまわなかつた。それから彼女は突然誰の前でも動かなくなり暫く恍惚状態に陥ることがある。何処を見てもない眼を前方に向け少しくねらす体に腕

をしなやかに添えてそのままの形を暫く保つ——そなたは何を見て何を考えるのかと問う者があれば、わたくしは母のことを始め一寸ちよつと想い出します。父が讒ざんせられた後の母は計られない世が身にしみて空を行く渡り鳥の行末さえ案じ乍ら見送りしました。でも、その苦勞性な母を思つてわたくしは、そんな苦勞は、いや、いや、わたくしはわたくしの有りのまま、性のままこの世のなかを送りましょう、と直ぐ思い直すとそれはそれはよい気もちになり恍惚として仕舞います——、と彼女はあでやかに笑うのであった。その申もうしわけ訳は嘘かまことかともかく麗姫のその状態を人々は「麗姫の神遊」と呼んで居る。そのとき薄皮の青白い皮膚にうす桃色の肉が水銀のようにとろりと重たく詰つた麗姫のうつくしさはとりわけたつぷりとかさを増すのであった。麗姫はまた、随分客に無理な難題を持ちかけた。莊子のパトロン支離遜は決して彼女に色恋の望みをかけてのパトロンではなかったが、それだけにまた彼女は余計甘え宜かった。ある時は西の都の有名な人形師に、自分そっくりな生人形を造らせて呉れとせがんだ。それからまた東海に棲む文ぶん魚ぎょを生きたままで見せて呉れとねだつた。その魚は常に西海に棲んで居て夜な夜な東海に通つて来る魚だなどと云われて居た珍らしい魚であった。この魚に就いて書かれてある山海せんがいきよう經きやう中の一章を抽ひいてみる。状如鯉魚、魚身而鳥翼、蒼文而首赤喙、常行西海、遊於東海、以

海飛、其音如鷄鸞。

だが東海の海近い姑蘇こそから出発して揚子江を渡り、淮河わいがの胴に取りついてその岸さかのぼを遡り、周の洛邑へ運ぶ数十日間その珍魚を生のまままで保つことは、殆ど至難な事だった。支離遜はしかし或る神技を有する老人に謀って麗姫のその望みをかなえてやった。ただし老人はそれを運ぶ水槽のなかの仕掛けは誰にも見せなかつたという話だ。

莊子はこんな事をうつらうつら考え乍ら小さい燭の下で妻の田氏と沈黙勝ちな夜食を喰べて居た。考えれば考える程不思議な麗姫の存在だった。彼女は彼女が我儘をすればする程彼女の美しさを發揮するのだ……道は道なき処に却つて有るのではないか、彼女の如く拘束なき処に真の生命の恍惚感が有るのではなからうか……。

「あなた、遜さんが何かまた麗姫の珍らしい話でもして参りましたか」

妻の言葉に莊子ははつとしたが、まさか一婦人の存在を自分の「道」に係わる迄考慮して居たとも云い度くなかつた。

「別に珍らしい話というでもないが相変わらずやんちゃで美しいと云つてた」

と答え、それに申わけばかり云い足して、麗姫が池の魚の逃げたのを恨んだ話をつけ加えて何気ない様子で軽く笑つたが伶俐な田氏は大方夫の胸中は察して居た、しかも、何事

も夫の気持ちのリズムに合わせてようとして矢張り夫と同じその話を軽い笑いで受けた。

「ほ、ほ、ほ、相変らず可愛ゆい娘でございますね」

だが莊子はまたそれに重ねて笑う気持ちにもなれず、相変らず不味まずそうにもそりもそり夜食の箸はしを動かして居る。

妻の田氏は魏の豪族田氏の一族中から莊子の新進学徒時代にその才氣煥かんぱつ発などころに打ち込んで嫁入つて来たものであった。それが莊子が途中「道」に迷いを生じ始め漆園しつえんの官吏も辞め華々しかった学界の生活からも退いて貧しい栄えない生活にはいつてからも昔の豪奢ごうしゃな育ちを忘れ果てた様に、何一つの不平もいうところなく彼に従つて暮して居る。きりようも痩せては居るが美しかった。莊子もこの妻を愛して居る。だが、莊子はこの妻の貞淑にもまた月並な飽足あきたりなさを感じるのだった。つまり貞淑らしい貞淑は在来の「道らしい道」に飽きた莊子にとって無上の珍重すべきものではなかった。伶俐な田氏は夫の自分に対するその心理さえ薄々知つて居てあえて不平も見せなかった。

小童を手伝わして食卓を撤したあと、袖をかき合せて夜風の竹の騒ぐ音を身にしませ乍ら、田氏はなるたけ夫の感情を刺戟しないようさりげなく云つた。

「ねえ、あなた。あなたもたまには洛邑にでも出てお気晴らしをなさっていらっしやいま

せ、こんな田舎で長いこと毎日独で考え込んでばかり居らっしゃるのはお体の為によくありませんでしょう」

田氏はまた燭の火に一層近づいて髪の毛の銀簪がすこし揺れるくらいの調子でつけ加えた。

「ねえ、洛邑に沙汰して置いて遜さんが次の商用で旅に出ないうちに一度是非行つていらつしやいませ。そして久しぶりであの無邪気な麗姫にも逢つてごらんないませ。案外、お気持も晴れて、御勉強の道も開けて参るかも知れません」

莊子はじつと瞳を凝らして妻の顔を見た。妻が、決して、りんきやあてこすりで麗姫に逢えと云うので無いことは判り過ぎるほど判つて居た。それでも莊子は深く妻のその言葉に感謝するという単純な気持ち以外にあまりにこの女の貞淑の誂え通りに出来上つて居る、というような不思議な気持ちで妻の顔をじつと見て居た。

夜の寝箱にとじ込められる数羽の家鴨のしきりに羽ばたく音がしんとした後庭から聞えて来る。

その後一ヶ月ばかりして莊子は妻の熱心なすすめ通り兼ねて沙汰して置いた支離遜からの迎えもあつていよいよ洛邑へ向けて旅立った。

秋も末近いのでさすがに派手な洛邑の都にも一かわさびがかかっていた。さしも天下に覇を称えられていた周室はすっかり衰えて形式だけの存在になったが、その都である洛邑はやつぱり長い間の繁昌の惰性もあり地理的に西寄りではあるが当時の支那の中心に位し諸国交通の衝路に当りつつ歌舞騒宴の間に説客策士の往来が行われ諸侯の謀臣と秘議密謀するの便利な場所であった。

莊子が遜に連れられ洛邑の麗姫の館に来たのは夕暮を過ぎて居た。二人は中庭を取囲むたくさんの部屋の一つに通された。星の明るい夜で満天に小さい光芒が手を連ねていた。庭の木立は巧たくみに配置されていて庭を通して互いの部屋は見透さぬようになっていた。窓々には灯がともり柳の糸が蕭しょう条じょうと冷雨のように垂れ注いでいた。

二人が侍女を対手あいてに酒を呑み出して居るところへ「蠅よう翼よくの芸人」が入って来た。半身から上が裸体で筋肉を自慢に見せて居る壯漢が薄手の斧おのを提げて来た。あとから美しく着飾った少女が鼻の尖にちよんぼり白土を塗って入って来た。その白土の薄さは支那流の形容でいえば蠅の翼ほどだった。少女は客の前へ来てその白土に触れさせないようにその薄さだけを見せて置いて床へ仰向けに大の字なりに寝た。壯漢は客に一礼して少女の側に突立った。斧が二三度大きく環を描いて宙に鳴った。はっという掛声と共に少女の鼻端の白

土は飛び壁に当ってかちりと床に落ちた。少女はすぐさま起き上って嬌然と笑った。こもり白い鼻は斧の危険などは知らなかったように穏かだった。壮漢はその鼻の上を掌で撫でる形をして「大事な鼻。大事な鼻」と云った。遜も侍女たちも声を挙げて笑った。戦国の世には宴席にもこういう殺気を帯びた芸が座興を添えた。

目ばたきもせず芸人の動作に見入っていた莊子はつくづく感嘆して訊いた。

「これには何か、こつがあるのかね」

壮漢は躊躇なく答えた。

「こつは却って、この相手の娘にあるんです。この娘は生れついでから刃ものの怖ろしいことを知らないんです。斧に向つても平気でいます。それでわたくしはやすやす斧を揮ふるえるのです」

莊子は「無心の効能」に思い入りながら少女を顧みた。少女は侍女の一人から半塊の柘榴くろくろを貰つて種子を盆の上に吐いていた。それを喰べ終ると壮漢に伴われ次の部屋へ廻りに出て行つた。

薫る香台を先に立てて麗姫が入つて来た。部屋の中は急に明るくなった。彼女はその美を誰にも見易くするように燭の近くに座を占めた。

彼女は生れつきの娥がほびまん※靡曼ろーまに加えて当時ひそかに交通のあつた地中海沿岸の発達した粉ふ黛んたいを用いていたので、なやましき羅馬風の情熱さえ眉にあふれた。

彼女の驕慢も早く洛邑に響いた稀世の学者莊子には一目置いて居た。彼女はおとなしく莊子の前に膝まずいた。

「よくお越し下されました。随分お久しぶりにお目にかかります」

「田舎へ入って仕舞つてどちらへも御無沙汰ばかりです。だが、あなたは相変らずで結構ですな」

「はい、有難う御座います。お蔭さまをもちまして……あのお宅さまでは奥様も御機嫌およろしゅう御座いますか」

「先ごろから少々わずらつて居ますがさしたることもありません。大方なれない田舎棲いでいくらかこころが鬱したからでもありません。でもありません。でもありません」

「ちと都の方へもお出向き遊ばすよう御言伝えて下さりませ」

「懇ねんじゅうなお心づかい有難う、とくと申伝えてつかわしましょう」

しかし、莊子と麗姫の儀礼をつくした言葉のやりとりはその辺で終った。やがて麗姫は何もかも忘れてしまつて自分の興そのものだけを空裏に飛躍させ始めた。莊子はその境地

を見るのを楽しみにしてこそ麗姫に逢いに来たのである。彼は心陶然として麗姫の興裡に自分も共に入ろうとした。

「……海上に浪がたつ時、その魚は翼をのぼして、一丁も二丁も浪の上を飛ぶのですつて」

彼女は、それを繰返し繰返し云うのであった。莊子は始め、彼女が何を云い出したのかと思つたらそれは先頃支離遜に無理難題を云いかけてはるばる東海から彼女が取寄せて貰つた生きた文魚の話であつた。彼女はそれを折角せつかく生きたままで手許てもとへ運んで貰つても、彼女が洛邑の桶師につくらせた方一丈の魚桶では一向その魚がその本性の飛躍をしないでしおしおと水につばさをしぼめて居るのが残念だというのである。さてこそ彼女は身ぶり手まねでその魚が東海の浪の上を飛ぶであろう形まで真似てひとつには彼女の心やりとし、人に訴えてかなわぬ願いの鬱憤を晴すのだった。

「海上に浪が立つ時、その魚は翼をのぼして浪の上を一丁も二丁も飛ぶのですつて」

彼女は幾度か目にそれを云つたあと、ころころと声を高欄の黄金細工にまで響かせて笑つた。だがその笑いのあとの眼を莊子にとどめると彼女は真面目に支離遜に向いて云つた。「莊先生はお変りになりました。もと洛邑にお居での時は私のたわ言など、こんなに真面

目に聞き入っては下さいませんでした。何か鋭いませ返しおつしやを仰るか、ほかのお方とお話をなさるかでした」

「まあ、そうむきにならなくとも宜い。先生は田舎へ退隱なされてからずっと渋くおなりなされたのです」

「そう仰ればもとはあんなにお美しかったお顔も鉛色におくすみなされて……して、その先生が何故わたくしなどをお招びになり馬鹿らしい所作にさもさも感に堪えたような御様子をなさいますのやら」

支離遜は手持ち無沙汰に苦笑して居る莊子の方を見やり乍ら何と返事をしたものかと迷って居たが、麗姫がむやみに返事をせき立ててやまないのどうとう云って仕舞った。

「先生はな……実はな……あんたの我儘が見度くて来られたのです」

「え、わたくしの我儘が？」

「そうだ、あんたの天下第一の我儘がしきりに見度いと仰しやって私に案内をさせなされた」

「まあ私の我儘を今更何で先生が……」

そのとき麗姫の顔には愁さびしいとも恥かしいとも云い切れない複雑な表情が走った。支離

遜は曾て彼女にこんな表情の現れたのを見たことが無かった。だが、莊子はふかく腕をこまぬいて瞑目して居たためその表情を見のがした。

また一ヶ月程たった。初涼のよく晴れた日である。あたたかい日向の沢山ある櫛社のあたりへ一輛の旅車が現れ、そして莊子の家の門前に止った。車のなかから現れたのは供の者に大きな土産包みを持たせた支離遜だった。低い土塀の際の葉の枯れた牡丹に並んで短い蘭の葉が生々と朝の露霜をうけた名残なごりの濡色を日蔭に二株三株見せていた。もう正午にも近かろう時刻だったが莊子の家のなかはしんと静まっていた。遜は自分のあとからつかつか門内に入つて来た供の者を一寸手で制して、尚よく家の中のけはいをうかがつて居ると、裏庭に通じる潜り扉が開いて莊子の妻の田氏が手帛で濡れ手を拭き乍ら出て来た。

「おや誰ぞお人がと思いましたがら遜様で御座いましたか、さあ、どうぞ」

遜は入口の土間の木卓の前へ招ぜられた。

「奥様は何か水仕事でもなさつて居らっしゃいましたか、お加減がお悪いとか伺いましたのに」

「いえ、大したことも御座いませんでお天氣さいわいを幸、洗濯ものをいたして居りました」

「奥様が洗濯までなさるような御不自由なお暮らしにおなりなさいましたか……いやいや長くはそうおさせ申して置きません、遠からずくつきような手助けのはしためをお傍におつけたすようお取はからい申しましよう」

「いえ、どういたしました、加減が悪いと申して大したことも御座いません、わずかなすすぎ洗たく位、この頃の夫のことを思いますれば却ってこうした私の暮らしが似合つてよろしゅう御座います」

「そう仰れば今日は莊先生には如何なされましたな」

「ほ、ほ、ほ、まだお気づきになりませぬか、あれ、あの裏庭の方から聞える斧の音……あれは夫が薪割りをいたして居る音で御座います」

「なに莊先生が薪割り？……それはまた何とした物好きなことを始められましたことです」

「いつぞや洛邑から帰りまして……そう申せばあの折は、大層なおもてなしを頂きました有難う存じました……あれから暫くの間考え込んで居りましたがふと思いついてあのようなことを始めましてから夫の日々が追々晴やかになりました、あのものぐさが跣で庭の草取りはする、肥料汲みから薪割り迄……とりわけ薪割は大好きだと申しまして……」

…無心で打ち降す斧が調子よく枯れた木体をからつと割る時の気持ちの好きは無いなど申しまして」

「昼間がそれで、読書や書きものなど夜にでもなさるとしたら……お疲れでも出なければ宜いがな」

田氏は少しためらった後思い切つて言った。

「いくら夫をおひいきのあなた様にでもこのようなこと申し難いので御座いますが……実は夫は此頃このころ読書も書きものも殆ど致さなくなりました。先夜なども、今まで読んで居た本が却つて目ざわりだと云つて、さつきと片づけにかかりましてその代りの夜なべ仕事に近所の百姓達を呼びまして豚飼いの相談を始めました。豚を飼つて、ことによつたら豚小屋へ寝る夜もあるか知れないなど申し、豚の種類の調べや豚小屋の設計まで始め、自分で板を割つたり屋根やね葺ふきを手伝つたり……」

「うむ」

支離遜は唸るように云つて田氏が汲んで出したなりでぬるくなつた茶をすすつた。田氏は控え目乍ら、今の自分達にとつて思うことを打ち明けられる人としてはこの人よりほかに無い遜にともかく聞くだけは聞いて貰い度く、

「わたくしがある夜、おそろおそろあなたはもう、「道」の研究はおやめになってこの里の村夫子になってお仕舞いになりますのか、と尋ねましたら、夫がいくらか勇んで申しますには、その「道」がそろそろ見え初めて来たよという返答を申しますでは御座いませぬか。わたくしがすこしあきれて、へえ、と思わず顔を見守りますと「道」はどこにでもありそうだ。「道」の無いところはないのだ。「道」は螻蟻ろうぎにもある。稗ていはいにもある。瓦がへぎにもある。屎尿しにょうにもある。と仕舞いにはごろりと身を横たえて俺は斯して居ても「無為自然の道」を歩いて居るのだと申すようなわけで御座います」

土間から裏口に通じる扉の外で莊子の咳払いが聞えた。それは好晴の日の空気に響いた。田氏はほほ笑み乍ら立ち上った。

「夫が参りましたようですが初手からあまり夫の此頃をよく御存じのような御様子をなるべくなさいませんように、追々お話をほぐして頂き度う御座います。でないとまたとんだつむじを曲げまいものでも御座いませぬので」

「はい承知いたしました」

遜がいかどの儀容を整えにかかるとき佝僂乍ら一種の品格が備わるのであった。莊子は扉を無器用に開けて土間へ入って来た。快晴の日の外気を吸って皮膚は生々した艶を浮べ

て健康そうに上気した顔は莊子の洛邑に住居した時代の美貌をいくらか取り返したように見えた。

「ひるの刻げんになりました。酒など温め、上座へお席をあらためておもてなしを致しましょう」

と云い乍ら厨くりやへ去った田氏に代つて莊子は空いた牀しょうぎ几ぎに腰を下した。

莊子は先ず先頃洛邑での遜のあついてもてなしを謝したのち、次には黙つて掌を示し、仰けた指の付根に幾粒も並ぶマメを撫でて遜に見せた。遜は落付いた声音で云つた。

「あなたは薪を割つて愉快な日頃をお過しですが洛邑では不興が起りました」

「え、それは何ですか遜さん」

「麗姫がな、あれからすっかり変りました」

「なに麗姫が？ 麗姫が何とかしましたか」

「あなたが麗姫を尋ねて洛邑を退出なさった頃から麗姫が変り始めましたな。今までの我儘を恥じる恥じるとそればかり申してな。髪形は気にする言葉使いは気にする。人の評判は気にするからもう以前の麗姫では無くなりました。どうしたことでしょう。それで却つて洛邑の人気を落して仕舞つたわけです。あの娘はあの勝手気儘なところで人を引きつけ

て居たのですからな。で私は云つてやりました。莊先生がそなたの我儘を見に来たと云われたのは却つてそなたののびのびして生きて居られる様子を快哉かいさいに感じられ「道」を極める莊先生に好い影響さえお与え申したのだ。見当違いに恥じたりなさるな。と呉々くれぐれも申し聞かせたのですが駄目です」

莊子は腕を措き眼を瞑つむつて深く考え沈んで居たがやがて沈痛な声の調子で云つた。

「然しかし、それもまた天恵に依る物化の一道程かも知れないから、致し方もあるまい。丁度わしが書物や筆を捨てて薪割りの斧を取上げたようにな」

遜はまじまじと莊子の顔を見て居たがややせき込んだ調子で云つた。

「私には何もかもまだはつきりと分りませんが、斯こういうことも麗姫に云つて聞かせてやつたのです。南海しゆくに、という名前の帝があつた。北海こくに忽こつという名前の帝があつた。二人は中央の帝の渾沌こんとんを訪問した。渾沌は二人を歓迎し大へん優遇した。そこで客の二人は何とかして礼をしようと思ひ相談したことには、〓人にはみな七竅しちきやうがある。それで視聽息する。ところが渾沌はそれが無い。われわれの好意で丸坊主の渾沌に七竅うがを穿つてやろうでは無いか。そこで二人は渾沌に日に一竅ほずつを鑿ほつた。そしたら七日目に渾沌は死んでしまった。〓どうだ天賦自然の性質をためようなんて量りやうけん見は間違つていよう。

莊先生がお聞きになつたら却つて苦々しくお思ひになろう。と斯うまでもさとして見ましたが、別にそれには返事もしませんで、私が以前こしらえてやりました「麗姫の活人形」を取出しまして、今度樂社の里の先生のお宅へいらつしやる時かならずこれを先生御夫妻に差し上げて下さい。先生御夫妻が可愛がつて下さった頃の麗姫のかたみだと申し添えてお届けして欲しいと申して……………」

遜は土間の隅に大きな包みを抱え、うずくまつて居る従者を顧み幾重にもからめた包装を解かせた。

扉のそとの外光を背にした麗姫の活人形が薄暗い土間につと躍り出た。

「あれ、麗姫が……………」

矢庭に驚駭きやうがいの声を立てたのは今しも其処そこに酒杯の盆を運んで来た田氏であつた。

青空文庫情報

底本：「岡本かの子全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1994（平成6）年2月24日第1刷発行

底本の親本：「鶴は病みき」信正社

1936（昭和11）年10月20日発行

初出：「三田文学」

1935（昭和10）年12月号

入力：門田裕志

校正：オサムラヒロ

2008年10月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

莊子

岡本かの子

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>